

目	「特定研究・新プロジェクトの発足にあたって」 1
次	1990年度「指定研究」 研究経過報告 2
	1991年度「指定研究」研究会 大学史編纂研究 3
	「ヨーロッパにおける大学の成立事情」 9
	国際仏教研究 10
	「台湾における佛教学研究の情況」 12
	「第5回国際真宗学会報告」 14
	1991年度後期開放セミナー 19
	彙報 20

大谷大学真宗総合研究所

研究 所 報

No. 27

1992. 3. 31.

特定研究・新プロジェクトの発足にあたって

大学史編纂研究班チーフ・教授 福島光哉

本研究所内に特定研究のプロジェクトがある。これは本研究所が、大谷大学の取り組むべき最も肝要な課題を選び、学長を研究代表者として若干の研究員その他をもって組織している。したがって「真宗総合研究」の核になる課題の研究であり、本研究所の存在理由を常に内に秘める研究プロジェクトであるといえよう。

その特定研究として「真宗学事研究」と「海外仏教研究」は、ともに本研究所創設当時より9年間、継続して来たプロジェクトであったが、本年3月をもってその使命を果たし、新しい研究プロジェクトにバトンタッチすることになった。もとよりこの両研究は当初よりかなり長い見通しのものとしに発足し、以来多くの分野の研究者が関わって真剣に取り組み、研究成果を生み出して來たが、今回その基礎的な研究段階を成し遂げ、「発展的に解消」されることになったのである。中でも、「真宗学事研究」は、多少の曲折はあったにしろ基礎史料を数多く蒐集し、とくに基本的な史料の出版にも見られるように、質的な諸資料の選択・整理に打ち込んで來た。いわば水面下の作業ともいいうべき基礎づくりに多大の努力を傾注し、地味ながら厚味のある研究を進めて、着実にその成果を積み重ねて來たことは、本研究所の特色を象徴的に表わすものである、と言えるであろう。

さて以上のような研究成果をふまえ、本年4月から「大学史編纂研究」が特定研究として新しく発足することになった。この研究プロジェクトの誕生は、前記の研究の基礎段階を克服し、飛躍すべき時期が熟したとの研究所の判断によるものであろう。じっくり内に貯え、咀嚼して來た果実を、いよいよ外に向って顯示する時期の到来ということがであろうか。すでに特定研究「大学開放研究」

のもとに『大学開放セミナー』が昨年より実施されている。これは大谷大学の研究が、社会に向かって積極的に関わっていく第一歩であるが、本年度からスタートした上記のプロジェクトにおいても、これに続いて大谷大学の研究成果を世に問うていく作業が求められているのである、と理解している。

このような重い課題を背負ってこれから研究業務を遂行するにあたって、今までの反省を含め留意すべきことは、「真宗総合研究」が目指す理念を改めて再確認することである。廣瀬元学長以来、本学の責任者が幾度か本紙面その他において、本研究所の任務について論じられて來た。それは本学の建学理念に立って、普遍性を有する広い研究を目指すことを基調とするものであった。今一度われわれは本研究所創設以来の使命と責任について甚深の反省を加え、足もとをしっかりと見ておして研究作業に取りかかる必要があろう。そのためにこのたびの特定研究を進めるには、世界的展望を常に保持して普遍性を追求しながら、大谷大学の独自性が浮き彫りにされるような作業が強く要求されるであろうと思う。ことに先に述べたように今年度からの特定研究が、形をとて社会に問い合わせる成果を期待するものであるとすれば、以上の点を具体的な研究作業レベルで真剣に検討し、内外諸賢の批判に堪え得るよう、周到な研究計画と、緻密な資料分析のもとに実施すべきであろう。

このたび特定研究の1プロジェクトに参画することになり、課題の重みを痛感している。しかし今までの研究成果をしっかりとふまえ、本研究所の目指す内実を求めて努力したいと念じている。

1990年度

「指定研究」研究経過報告

真宗学事研究

「大谷大学三百年史・それに 関する文献資料の研究」

研究員・チーフ 大竹 鑑

「真宗学事研究」では、1985年度以来、上記のテーマを与えられ、大学史編纂のための不可欠の基礎作業として〈資料収集整理〉と、その主な資料の〈刊行〉、及び〈研究〉を続行してきた。そして今年度に至り、積み重ねてきたその成果をもとに、この作業を引き続き行いながら、それと並行して、ようやく大学史編纂の具体的な体制づくりを構想することができる段階に達することができた。時あたかも「西日本大学史担当者会」が発足し、本学にも参加の呼びかけがあり、当研究が窓口になって2回の例会に出席し、本学もこれに参加することが決定された。例会では、規約の制定・幹事校の選出が行われた。その目的は“近代日本における大学の役割等を検証すること”とされ、そのための研究担当者養成も意図されている。各大学の現状報告もあり、各大学が学術的でしかも近代日本教育史の中に位置づけ得る大学史編纂に努めている。特にキリスト教系の大学では早くから資料の収集、発掘がなされ、資料室の設置、専任の担当者、資料の目録の作成など編纂体制が完備していることに驚かされた。

大学史の編纂は近年ますますその意義を大きくしている。後述するように本学が近世・近代において学術及び庶民教育に果たした役割を明確にすることは、早くより内外から期待されているところであるが、大学の未来像を探る上でも必須のことである。大学史編纂のための体制を確立し、同時に継続しつつある諸研究・作業を完了し、その成果の速やかな公開が期待されるところである。

このような中で、1986年以来作業を進めてきた『條規学則集』1・2を刊行することが出来たことは特筆すべきことであり、さらに『近代大谷派年表』の全データの入力を終了し、当研究データの充実を進めることができた。また今年度は大分県日田市の廣瀬淡窓の咸宜園関係の調査を行い、その社中名簿の撮影を行うなどの大きな成果を納めた。淡窓は大谷派長福寺の諸僧と親交をもち、

その名簿には大谷派を含めた数多くの僧侶が名を連ねている。近年、近世教育史の研究において再評価されている、僧侶の庶民教育に果たした役割を確認する好資料と言えよう。以下、今年度の研究成果とともに、当研究の最後に当たり今後の課題を指摘しておく。

1. 「刊行」(「真宗学事資料叢書」)

○『上首寮日記』IV(嘉永4年～明治3年4月)を7月末に刊行。さらに『上首寮日記』V(明治3年5月～明治5年12月)の刊行のために割付を進めているが、非常な悪筆のため読解に困難を極めている。

○『條規学則集』1・2の刊行。その構想・資料の収集中着手してから7年が経過したが、全体を編年体とし、寛文年中から明治6年まで(1661～1873)を第1部とし、明治7年から大正14年まで(1874～1925)を第2部としてようやく発刊することができた。第1部については、写本によって異同があるので、底本との照合ができるよう、各條規の末に対校を示し、また各写本の改題を巻末に付した。第2部は、主に大谷派の機関誌である『配紙』『宗報』等で公布された條規・学則を中心に、告示・挨拶・沿革等を収集整理していく。最後に収録した佐々木月樵学長の「大谷大学樹立の精神」には、刊行されているものに異同があるため、同じ大正14年の日付である自筆草稿本と、その口述の筆録と推定される大谷大学要覧本とを上下2段で対照できるように掲載した。

○『嚴如上人一代記』I(弘化3年～明治1年)の刊行。これは、全11冊を三分し、第4冊までを第1巻としたものである。巻末には解説と検索の便を図るために内容見出しを付した。II・IIIについても内容見出しの作成が必要であろう。

2. 「資料の収集整理」

○学科講座変遷表は、「真宗大学寮講義年鑑」を用い、宝暦5年から明治5年まで(1755～1872)、高倉大学寮・護法場においてなされた講義の分析をし、その傾向を調べ、「高倉学寮安居講座題目集計分類表」としてまとめた。

○教職員在職表については、昭和24年度から昭和47年度まで(1949～1972)を作成し、昭和61年度(1986)作成済の「大谷大学に於ける学科・講座・科目的変遷表」と対応できるようにした。なお真宗大学時代の明治34年から昭和23年まで(1901～1948)と、昭和48(1973)以降

現在に至るまでについては未着手である。

○大谷大学関係の雑誌目録は、『無盡燈』『合掌』『復興』のカード化とそのワープロ入力を終えているが、データベースへの入力を図り、さらに利便化する必要がある。これら図書館所蔵の雑誌は使用頻度が高く、本研究所に長期借用して研究することが出来ないので、複写の必要ができて、その複写を約半分完了した。その作業の中で欠本や欠落箇所が随分多いことがわかり、その補充が必要である。

○『中外日報』からの学事関係記事の収集は、昭和8年から昭和20年まで(1933~1945)を一通り終え、その資料台帳を作成することができた。作成済の明治30年から昭和4年まで(1897~1929)の資料台帳の整理を行ったが、数人で長期に亘つたため収集漏れがあり、またマイクロフィルム自体の欠落(昭和7年7月~12月、昭和19年3~4月、同年7月~10月)も発見された。今後他の機関等に紹介して補充する必要があろう。また『大谷大学新報』『大谷大学新聞』等の学内新聞のマイクロ化や目録作成も早急に着手しなければならないであろう。

○講師年譜は、易行院法海の撰述目録及び略年表の作成にかかり、現在その清書完成を依頼中である。香樹院徳龍の年譜は、天保14年まで完成し、以降の完成を期している。

○学事史年表のための学事資料のデータベース化は、「真宗学寮講義年鑑」を始め、カード化されたものはほぼ入力を終わった。また今年度は手薄であった近代以降のデータ拡充のため、『近代大谷派年表』の入力に着手し全データの入力を完了した。しかし、ソフト面では、1)入力データの校正、2)検索のための表記の統一、3)検索項目の分類、等の問題があり、4)さらなる拡充のための入力データの選択が課題となる。またハード面では、大容量ハードディスクや高速処理の機種の導入がゆくゆくは必要となろう。さらに専用回線の設置を待って、パソコン通信によるネットワークへの加入が不可欠になる。

○本年度の資料採訪調査は以下の通りである。

7月27日より新潟県水原町の無為信寺に補充調査を行い、不明であった香樹院徳龍の「不争室日記」を発見し撮影することができた。

11月9日より、易行院法海・雲華院大含関係資料の調査のため、熊本県八代市光徳寺、大分県日田市長福寺、同広瀬資料館、大分県中津市正行寺を訪問した。光徳寺・長福寺では法海の自筆講録や書簡を撮影し、広瀬資料館では広瀬淡窓・旭窓・青村時代の咸宜園社中名簿全冊の撮影を行った(3月27日より撮影の失敗や咸宜園・長福寺全景等の補充調査を行う)。淡窓と長福寺とは関係浅からざるものがあるほか、多数の真宗僧侶がその社中となっていることから、社中名簿の分析が望まれる。また法海などの講師が自坊に私塾を開設していたことがわかっているが、今後その実態調査を行い、地方教化に果

たした役割等を研究する必要がある。正行寺では大含の絵像と墓石を撮影することに留まった。

○新たな翻刻・資料整理としては、「学寮図面集」「学寮懸席と所化数」「諄風社蒙求(南条文雄著)」「明治初期東本願寺雜記」「学寮資料集成・目録(武田統一氏蔵)」「講師題号について」等の資料ノートを作成した。

3. 「研究」

a 研究会

7月24日 「易行院法海と九州学系」

資料整理員 武内和朋氏

3月5日 「学寮史の一視点

なぜ惠空師が初代講師とされるか

嘱託研究員 深田虎雄氏

b 講演会

6月21日 「大学史と大学史資料室」

同志社大学史資料室長 河野仁昭氏

c 『研究所紀要』第8号

当初香樹院徳龍の年譜の掲載を予定していたが、都合により次号の掲載となった。

d 『研究所報』第25号

「大谷大学三百年史に向けて

—近代における大学再形成—」

学長 寺川俊昭氏

「易行院法海と九州学系」

資料整理員 武内和朋氏

『研究所報』第26号掲載予定

「『條規学則集』1・2の編纂を終えて」

嘱託研究員 井上 円氏

e 西日本大学史担当者会

5月9日 第1回例会(於同志社大学)

発会の趣旨説明・規約の検討・幹事校の選定

7月11日 幹事校打ち合わせ会(於関西学院大学)

規約等の検討

9月26日 第2回例会(於関西学院大学)

規約年会費等の承認・幹事校の職務分担・各大学の現状報告

海外仏教研究

「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」

研究員・チーフ 長崎 法潤

海外仏教研究班は、1982年度に発足して以来、9年間にわたり欧米諸国における仏教研究の現状を調査・研究してきた。その目的は、一つに欧米言語で出版された研究成果を日本の学界に紹介すること、一つに欧米諸国の

仏教研究から有益な方法論を学ぶためにそれを整理・検討することにあった。

欧米諸国の仏教研究では、聖書研究で培われた厳密な文献学的研究方法が採られてきた。しかし、近年、欧米においては、あらたに社会学的な方法論を導入した研究やテクストとその研究者の関係性に焦点をあてた解釈学的方法論を探った研究がみられるようになった。このような動向は、従来の研究を活性化させるばかりでなく、それと有機的に結びつくことで、新たな境地をも開拓している。

一方、明治以降近代仏教学の名のもとで西欧から文献学的な方法論を導入した日本では、今もなおこのような研究方法が主流であるが、上述したような新たな欧米での学問研究の方法論に興味をもつ研究者もあらわれている。

そこで、われわれは、欧米諸国における方法論の新たな動向を整理・検討し、その結果を日本の学界に紹介することにより、日本における仏教研究の活性化をはかっていきたいと考えている。

以上の目的に沿って本研究班は研究活動を推進してきたが、1990年度の具体的活動としては、以下の5項目を中心に行われた。1)欧米で発表されている著作・雑誌の収集、2)収集された著作・雑誌論文の分析調査およびデータベース化、3)それに基づく書籍目録および雑誌論文目録の作成、4)研究会の開催、5)研究員の国際学会への参加。

これらの成果の一部は『研究所紀要』、『研究所報』に発表されている。

【研究の成果】

1990年度、海外仏教研究班は上記5項目について、次のような研究成果を得た。

1. 今年度は238冊の単行本、91種の雑誌を収集し、必要なデータを抽出し、コンピューターに入力した。
2. パーソナル・コンピューターによる既収集データのデータベース化を継続した。具体的には、1990年度収集の雑誌のうち1989年までに発行された雑誌より仏教関係論文(520件)を抽出し、分類後データ入力した。
3. 1988年度の研究成果である、「BIBLIOGRAPHY OF FOREIGN-LANGUAGE ARTICLES ON JAPANESE BUDDHISM 1960-1987」(『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』Vol. 6掲載)に対するサブルメント(補遺、1960-1989)を編集作成した。これは『研究所紀要』Vol. 8に「BIBLIOGRAPHY OF FOREIGN-LANGUAGE ARTICLES ON JAPANESE BUDDHISM: SUPPLEMENT 1960 TO 1989」と題して掲載された。これには先に公表した Bibliography から漏れた文献を追加収録し、誤字の訂正表を添えた。さらに両 Bibliography に共通の雑誌並びに論文集の名称、

出版社、出版地等を記載した一覧を付して利用者の便を計った。

4. 邦外仏教研究者並びに本研究班所属の研究員による研究会が1990年度は以下の如き内容で開催された。

1) 7月5日

'The Decline of Buddhism in India'

Dr. Sanghasena Singh

Prof. of Sanskrit and Pāli, Department of Buddhist Studies, University of Delhi

2) 7月20日

「仏教と文化——知識社会学の視点から——」

デボウ大学教授 ポール・ワット博士

3) 11月6日

「アメリカにおける仏教研究者の視点」

本学教授 長崎法潤研究員

4) 12月21日

「英訳教行信証についての一局面——鈴木大拙訳

'The Kyogyoshinsho' を中心に——」

本学助教授 安富信哉研究員

5) 3月16日(1991年)

'New Archaeological Excavation in Central Asia and Ancient India'

Dr. G. M. Bongard-Levin

Institute of Oriental Studies, Academy of Sciences, USSR

以上の如く、本年度は5回の研究会が開催された。これらの研究会は、邦外研究者の新たな研究を直に知り得る機会としてだけでなく、欧米における仏教研究の方法論を検討する場としても機能しており、本研究班には不可欠なものとなっている。

なお、研究会は原則として公開で行われ、京都周辺の8大学8研究機関に案内を送付し、さらに英文による案内状も作成し、在日外国人研究者にも積極的な参加を呼びかけている。また、研究会には、常時30名以上、多いときは50名程度の参加者があった。

5. 国際学会への研究員の参加は、研究会と同じく最新の研究動向を把握するためには欠かすことができないものである。今年度はローマ大学で開かれた国際宗教史学会に研究員が参加し、研究者との交流、情報の収集、並びに研究の現状調査を行なった。

国際宗教史学会第16回大会<ローマ>(9月3日-8日)

加来雄之 研究員 加藤 均 嘱託研究員
なお、加来、加藤両研究員は『研究所報』No. 26に「ローマ大学における国際宗教史学会第16回大会に参加して」と題して、この学会の状況を報告した。

【研究の考察・反省】

仏教研究に関する方法論の研究と文献資料の収集は、

「海外仏教研究」の課題の二本柱といえる。方法論については、本研究班は発足以来今年度に至るまで研究を継続してきた。その研究成果は来年度には総括され公表されることになっている。そこで、ここではもう一つの柱である文献資料の収集について新たに浮かび上がってきた問題点を挙げてみたい。

本研究班では過去9年間の資料収集活動の一つの結果として、すでに3000冊の書籍、91種2500点にのぼる雑誌を所蔵することができた。これは勿論通常の図書館の蔵書には遙かに及ばない小規模のものである。しかし、欧米言語で書かれた仏教関係の研究文献がこのように一ヶ所に集められている例は近畿圏では希であり、在日外国人研究者からも高い評価を受け、有効に利用されている。

このような蔵書の充実は我々にとって喜ばしいことであるが、従来の図書選定基準を基にした文献収集が一段落してきたことを一面では示していると言えよう。

当初、定められた図書選定基準は次の4項目であった。

- (1)欧米言語による著作であること。
- (2)欧米諸国における研究業績であること。
- (3)一定の学的水準を越える仏教関係の研究書であること。
- (4)発行年度が1960年以降であること。

実際、このような図書選定基準は昨年度までは効果的に機能してきたが、特に今年度は1960年以降の出版物についてこの基準内での収集が完了しつつあることが書籍発注作業中に明らかになってきた。そこで、今後文献収集にあたっては研究業績の時期的な区分や地域的区分を広げる形で新たな図書選定基準を設定し、より広範な資料収集を目指す必要性が出てきたと言えるであろう。

(加藤 均・大友康敬 記)

大学開放と生涯学習の研究

「大学開放と生涯学習 —その理念と実践の研究—」

研究員・チーフ 渡辺 貞磨

昨年度発足した「大学開放と生涯教育の研究——公開講座・それに関する研究、実施および資料の収集整理——」は、一年間の研究成果を踏まえ、プロジェクト名を「大学開放と生涯学習の研究『大学開放と生涯学習——その理念と実践の研究——』」と改めた。これは大学開放の理念の具現化を自らの閉鎖性の打破に求めようすることに基づいている。

そしてその具体的な成果として、1990年9月25日「開放セミナー」の発足式が、またその開設記念特別講座として10月20日から寺川俊昭学長による「親鸞の世界——『教行信証』——」、さらに10月27日から岩田慶治教授

による「文化人類学から見た自然、『風景』、宗教」がスタートした。なお、「開放セミナー」は“対話”を重視する事を目指しており、数回にわたる連続セミナーの形式をとっている。

今後、当特定研究においては、大学開放の理念そのものの研究を、その具現化を示す「開放セミナー」で得た様々な研究成果をふまえ、さらに深め、報告する予定である。

I) 資料収集

6月25日(月) 東北大学教育学部附属「大学教育開放センター」(於仙台市)
調査及びインタビュー
(東北大学) 萩原敏明教授・星山幸男
助手
(インタビュー) 主事 木村宣彰助教授
嘱託研究員 署弘信・土門政和

11月4日(日) 文部省主催第2回生涯学習フェスティバル
シンポジウム'90「生涯学習と大学」
(於京都会館)(出席 土門)
11月5日(月) 文部省主催第2回生涯学習フェスティバル
「大学開放の在り方に関する研究会——これから大学開放をいかに進めるか——」(於国立京都国際会館)
(出席 木村・署・土門・中川)

II) 研究

①研究所報
②開放セミナー

①「特定研究に寄す——真宗学事研究・海外仏教研究・大学開放と生涯学習の研究——」
(『研究所報』No.24 1990/7/31)
チーフ・本学教授 渡辺貞磨氏
「佐々木月樵先生に於ける大学開放の願いについて」
(『研究所報』No.24 1990/7/31)

本学名誉教授 山田亮賢氏
「第2回生涯学習フェスティバルに参加して」
(『研究所報』No.25 1990/12/31)

嘱託研究員 土門政和氏
「第2回生涯学習フェスティバルに参加してⅡ」
(『研究所報』No.25 1990/12/31)
嘱託研究員 署弘信氏

②開放セミナー

開設記念特別講座I (講師 寺川俊昭教授)

「親鸞の世界——『教行信証』——」

- 10月20日 (土) 『教行信証』の志願
 11月10日 (土) 真実の言葉との出遇い
 11月22日 (木) 大いなる無量寿経
 12月 6 日 (木) 救いを求めるもの
 12月13日 (木) 如来の回向
 開設記念特別講座Ⅱ (講師 岩田慶治教授)
 「文化人類学から見た自然、『風景』、宗教」
 10月27日 (土) 神秘経験
 11月17日 (土) 遊び
 12月 1 日 (土) 風景

III) 全体会議・研究会・開放セミナー実施経緯

- 第1回 5月 2 日 (水) 14:30~ (7名)
 今年度の研究計画について
 第2回 5月18日 (金) 18:00~ (7名)
 第3回 6月 6 日 (水) 17:30~ (7名)
 第4回 6月15日 (金) 18:00~ (8名)
 各大学公開講座企画運営組織の実態
 第5回 7月 6 日 (金) 18:00~ (8名)
 東北大学教育学部附属大学教育開放センター調査報告
 第6回 7月13日 (金) 19:00~ (6名)
 第7回 7月25日 (水) 17:00~ (8名)
 趣意書確認に基づく具体的研究
 第8回 8月 6 日 (月) 14:00~ (8名)
 講座実施に向けての具体的研究
 第9回 8月20日 (月) 13:00~ (6名)
 内外に向けて考えるという視点をもち得る名称であるとして「開放セミナー」決定
 第10回 8月22日 (水) 17:00~ (7名)
 研究の活性化という立脚点にたち、実施細目検討 (カリキュラム・調査研究費・定員・広報・会場他)
 第11回 8月27日 (月) 17:00~ (7名)
 広報と募集に関わる具体的な業務担当について
 第12回 8月31日 (金) 17:00~ (5名)
 (継続研究)
 第13回 9月10日 (月) 13:30~ (8名)
 (継続研究)
 第14回 9月14日 (金) 17:00~ (8名)
 実施要綱について・広報内容の検討・日程の打ち合わせ
 第15回 9月21日 (金) 18:00~ (7名)
 (継続研究)
 第16回 10月11日 (木) 18:00~ (9名)
 開放セミナー申し込み状況・当日業務役割分掌について

- 第17回 10月18日 (木) 12:00~ (9名)
 学内の教職員の受講についての確認
 第18回 10月25日 (木) 16:00~ (8名)
 第19回 11月 7 日 (水) 16:00~
 来年度「開放セミナー」講師について・アンケートの内容について
 第20回 11月14日 (水) 11:00~
 第21回 11月26日 (月) 17:30~ (8名)
 チーフ会議の内容・岩田先生の開講式の進行について・アンケートについて
 第22回 12月21日 (金) 13:00~ (8名)
 実施面における規程について・来年度の構想
 第23回 1月10日 (木) 17:00~ (8名)
 実施規程について
 第24回 2月20日 (水) 13:00~ (9名)
 1991年度前期開放セミナーの講師について・実施規程について
 第25回 3月 1 日 (金) 13:00~ (8名)
 開放セミナー総括について・実施規程について
 第26回 3月13日 (水) 13:00~ (8名)
 1991年度後期開放セミナーの講師について・開放セミナー総括について
 「開放セミナー」実施経緯
 7/25 「趣意書」確認
 8月上旬 講師への依頼
 9/4 事務局長との話し合い
 9/11 開放セミナーに関する予算作成
 9/12 当局会議・事務局長、経理課長とのヒアリング
 9/13 公募推薦に関わる広告
 9/17 新聞広告、中吊広告の原稿を代理店に渡す
 9/18 独自ポスター原稿渡す
 9/19 研究所委員会・教授会
 9/20 課長会
 9/21 事務職員会
 9/25 開放セミナー発足式
 ポスター発送 (~9/26約500ヵ所)
 9/29 読売新聞広告掲載
 10/4 京都新聞広告掲載
 10/6 文化時報記事掲載
 10/8 開放セミナー申し込み締め切り (中吊広告の遅延により延長)
 10/13 文化時報記事掲載
 10/17 朝日新聞記事掲載
 10/20 開放セミナースタート

(籠 弘信・土門政和 記)

西蔵文献研究

「大谷大学所蔵の北京版大蔵經及び 蔵外文献の文献研究」

研究員・チーフ 小川 一乗

西蔵文献研究班は、大谷大学図書館が所蔵する数千点の貴重なチベット語文献コレクションを整理、研究することを目的に組織され、発足以来「北京版西藏大蔵經」の勘同目録の作成および蔵外文献中に含まれる稀覯書の研究、出版を継続中である。1990年度の研究経過としては、勘同目録の編集作業の継続の他、蔵外文献の中から、サキヤ派のブンタクスンパによって著された俱舍論註釈書を公刊することができた。

蔵外文献の出版については、コレクションに含まれる稀覯書類から次のような文献が本研究班によってリストアップされ、その出版にむけて整理、研究が続けられてきた。

- (1)No.12459 チベット語訳『大唐西域記（抄本）』 グンポキヤブ訳（写本）
- (2)No.13971 『知識論決釈広註・善釈要集』 ツアンナクバ著（写本）
- (3)Nos.13949-13954 『中觀学説決釈集』 シェラブシンバ著（写本）
- (4)No.13792 『俱舍論語義解明・善説の陽光』 ブンタクスンバ著（写本）
- (5)No.13957 『入中論』に基づくセラ寺教科書（写本）
- (6)Nos.13955-13956 アビサマヤ関係論書に基づくセラ寺教科書集（木版）
- (7)Nos.13984-13987 ウパローセルによるチベット語文法関連著作（写本）
- (8)No.13983 ドゥルガシンハの『カータントラ（カラー・パ梵語文法）註釈』に対するロドゥーギエンツェンの複註（写本）
- (9)No.12460 チベット語による『中国佛教史』 グンポキヤブ著（木版）
- (10)No.13981 『サンブ学問寺歴代管長記』（写本）

本研究班ではこれらの文献について、整理を終え次第『大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書』の名で臨川書店より出版中である。1987年度にはモンゴル人グンポキヤブによって訳されたチベット語訳『大唐西域記』、1988年度にはダルマキールティの『知識論決釈』に対するツアンナクバの註釈書『知識論決釈広註・善釈要集』、1989年度にはサンブ僧院を構成するゲルク派のニマタン学堂長を務めたシェラブシンバの中觀学説に関する6文献を

『中觀学説決釈集』の仮題を与えて出版した。

そして本年度は、叢書の第4冊目として、チベットに於ける15世紀のサキヤ派の学僧ブンタクスンパによって著わされた『俱舍論語義解明・善説の陽光』を既出版リストに加え、学界に公開することができた。本書のタイトルは、詳しくは『正しき阿毘達磨俱舍論の語義を解明する論書・善説の陽光 (Dam pa'i mngon pa mdzod kyis tshig gi don gsal bar byed pa'i bstan bcos, Legs par bshad pa nyi ma'i 'od zer)』と言う。本文献は大谷大学図書館に保存されているチベット語文献コレクション中の「ウメ書体による写本類」に含まれるが、この写本以外には世界各地のコレクションにその存在は全く知られておらず、稀覯書とされているものである。チベットの僧院における仏教研究は、般若、論理、律、阿毘達磨、中觀の五科目を習得することが、まずその基本とされるが、阿毘達磨の分野については、世親の『俱舍論』の学習に尽きると言っても過言ではない。そのために最も有名で後代まで多大な影響を与えたチム・ジャンピーヤンの『俱舍論釈』を始めとして多くの註釈書がチベット人自身の手で作られた。そのような伝統の下に本書も著されたが、何故か本書は木版に付されて流通することもなく、現在に至った。著者のブンタクスンパについても、詳しいことは分からず、チベットの歴史書にそのごく簡単な伝記と名前の由来——ブンタクスンパとは「十万頌般若を三度習得した人」の意——が記されるのみである。本書の内容とその著者ブンタクスンパの詳細についてはさらなる研究が要請されるが、それだけに本書は注目に値する貴重な資料と言える。

本書の公刊によって、蔵外文献についてはすでに4冊が出版されたことになるが、来年度以降もリストアップされた文献から順次出版予定である。なお本叢書の既刊4冊については、一般書店の他、当研究所においても入手可であるので、希望される方はお問い合わせ頂きたい。

(小谷信千代 記)

大蔵經學術用語研究

「『大正新脩大蔵經』毘曇部関係 典籍における学術用語の研究」

研究員・チーフ 鍵主 良敬

本指定研究は、昨年度より新たに開始されたものであり、本研究の目的と方法については既にその概略を簡潔に述べておいた（『研究所報』No.25を参照）ので重複を避けることにしたい。そこで、ここでは主に本年度の研究の経過及び今後の課題に焦点をあわせて報告することにしたい。

本学が編集の責任を持った最初の大蔵經學術用語研究

の成果である『大正新脩大藏經索引第16巻毘曇部下』は、本学において最初であったばかりではなく、仏教系六大学で組織した大藏經學用語研究会にあっても最初の研究成果であった。その意味では、本書は人類史上最初の本格的な大藏經研究の成果であると言うことができる。従って本書を編集するに際しては、全く未知の領域であったために様々な問題点に悩まされたことが察せられる。それらに苦しみながらもとにかく一冊の索引を完成したことは、その後の大藏經學用語研究の重要な礎となつたのである。本書の後、本学においても他大学においても本書の編集過程で得たノウハウを生かしながら幾冊もの索引編集を経験し、それによって索引の編集方針などは随分と整理されるに至った。その整った視点から本書を返り見る時、本書には多少の不都合や不統一が存在することは否めない。その不都合を解消して今日の利用者の要望に応えられるものに改めることができることが本研究の中心的なねらいである。

昨年度と本年度の2年間を通して明らかになった点をいくつか取り挙げて紹介しながら今後の課題について整理しておきたい。前述したように、本書の内容を今日的な視点から検討してみた時、多少なりとも問題があると思われるいくつかの点を大きく整理してみると次の二つの性格によるものであることが明らかとなった。まず第一群は、編集作業上の過失が原因で生じたと考えられるものである。この中には、(1)行・段などのずれ、(2)文字・記号などの欠落、(3)分類項目などの見出し語の情報についての欠落、(4)その他の校正上の過失などを挙げることができる。このうち(1)及び(3)に属するものは、一見して容易に誤りを見つけ出すことが可能であるが、(2)や(4)に属するものについては、本書出版後の利用の過程の中で明らかになった例などのように既に判明しているものは問題ないが、同様な箇所を新たに発見することは極めて困難である。鋭意努力して一つでも多く訂正したいと努めているが、問題の性格上完璧を期待することは到底できない。いずれにしてもこの第一群に属する問題点は、当該箇所が判明しさえすればそれを改訂することについては何の障害もない。次に第二群に属するものについてであるが、これは編集方針の違いによって生じたところの不統一であり、利用の障害となっていると考えられる諸点である。この問題については、既に触れたような本書の編集出版の事情を鑑みる時、その理由も首肯されるのである。この中には(1)首字（用語の最初の文字）の分割、(2)配列の順序に関するもの、(3)参考項目の加不足、(4)解題・凡例などの訂正・補足といった問題が含まれている。これは先ほどの第一群に属する諸問題とは異って、編集方針の違いによるものであるから誤りというのではない。ただ本書の有効な利用を願う時、その障害となることが考えられるために改めた方が望ましいという性質のものである。試みに(1)について実例を挙げてみよう。

本書は「要語は専門の学者のみならず一般の便宜にも供するため、原則として仏教術語は呉音で、一般用語は漢音で並べ」（本書解題5ページ）られている。その結果、同一の首字を持つ用語群が仏教語であるか一般語であるかによって二つ以上に分けて配列されている。例えば「金銀」は一般語であると判断されて「キンギン」と読まれ「キ」の項の中に、「金剛」は仏教語と解されて「コンゴウ」と読まれ「コ」の項の中に配列されている、という具合である。この他にも言説（ゴンセツ）と言語（ゲンゴ）・言詞（ゲンシ）、男（オトコ）と男子（ナンシ）・男女（ナンニヨ）などのように二ヶ所以上に分割して配列されている用語群はかなりの数にのぼっている。このような配列の仕方は、解題が自ら述べているように、一見すると学問的に厳密であるかのように思われる。しかしながら、今一歩進んで考えてみると「金銀」と「金剛」とについて、それが仏教語であるか否かを判断して配列しているわけであるから、その編集者の意図に従って本書を利用することができるのは編集者と同程度以上の識別能力を持つ人に限られることになるであろう。つまり「金銀」を「コンゴン」と読む人も、「金剛」を「キンゴウ」と読む人もいずれも一回の操作ではめざす用語に行きつけないのである。不特定多数の人が利用するという本書の性格を考えるならば、このことは改善されなければならないであろう。これらは二ヶ所にあるよりもどちらか一ヶ所にまとめていた方がかえって引きやすいのではなかろうか。例えば「金銀」も「金剛」も「コン」の項目に配列されていて、「キン」を引いた人にはそれが「コン」に配されていることが指示されている、といった方法で配列されている方がかえって便利なのではないかと考えられるのである。このような点を踏まえて、後には同一の首字は原則として一ヶ所に集めるという、いわば電話帳の配列に似たような編集方針が確立されていったのだと思われる。その他の(2)(3)(4)の各点についても実例を挙げて説明すべきであるかもしれないが、多少傍論に亘るようにも思われる所以ここでは省略することにしたい。

最後に今後の課題について一言しておかねばならない。本指定研究の最終的な目標は、今までの様々な研究成果を盛り込んだ、より完備した『大正新脩大藏經索引毘曇部』を出版し、内外の要望に応えることにある。先に述べてきたようないくつかの問題をどのような形で具体的に改めていくのか、そのための方法的な検討を重ねていくのがこれから課題ということになる。

（織田顕祐 記）

『大学史編纂研究』研究会報告

日時：1991年5月16日／6月18日

場所：大谷大学真宗総合研究所22研究室

〈指定研究〉

ヨーロッパにおける大学の成立事情

——中世の大学の起源とベルリン大学の設立——

研究員・助教授 土戸 敏彦

大谷大学の歴史を顧みるにあたって、わが国の大学の源流の少なからぬ部分が欧米の大学に発するとの認識から、さしあたり以下の二つの点に着目して報告を行った。すなわち、そのひとつは、ユニヴァーシティの語源ともなった12～14世紀における学問的ギルドとしての大学の成立であり、いまひとつは、近代的大学としての方向性を新たに設定したベルリン大学の設立事情である。

大別して、西洋の大学の成立類型は三つあると考えられる。第一にボロニア・パリ・オックスフォード等の中世来の大学の型であり、次に19世紀初頭に創設されたベルリン大学のそれであり、三つ目は実用性を重視し、産業界と密接な関係をもつアメリカの大学のタイプである。本報告で考察の対象となったのは、このうち前二者である。

I 中世の大学の起源

まず、ボロニア大学についてみる。11～12世紀、ヨーロッパ商工都市において、これまでの中世的、封建社会的な法制度ではなく、近代市民社会的な法原理、個人の財産権・個人相互の契約権を基礎にした法体系が要請されていた。これに応えるものとして、ボロニアの学者の革新的な法思想が歓迎され、多くの学徒を集めたのであった。ボロニアの町に集まつた多くの学者と学生たちが、12世紀頃、当時の諸都市に発生しつつあった商人や手工業者のギルドに模して、自分たちの利益を共同して守るためにウニヴェルシタスなる組合を結成した。教師の（そして学生をも含んだ）ギルドとしてのウニヴェルシタスの主要な目的は、手工業ギルドと同じようにむやみに同業者を増やさないためであり、これによってその町で教師として開講するためにはその免許を教師ギルドから受けなければならぬこととなった。それは同時に、ウニヴェルシタスがいかなる権力からも干渉されない自主的な組織であることを意味した。ちなみにこのボロニ

アの学生団（それも一つのウニヴェルシタスである）の力は、教師のウニヴェルシタスに対して他に例をみないほど強いものであったという。

しかし、このような集団の発生と発達は、旧体制権力すなわちローマ教会にあっては憂慮すべき事態であり、対抗措置として新興の教師たちを権力をもって規制しつつ、教会法の体系化を奨励し、教会法学者を育てる等の手段をとった。かくて、市民法学者のグループと、権力に擁護された教会法学者のグループとが併存、対立し、両派はやがてそれぞれ別個のウニヴェルシタスを形成するに至った。ウニヴェルシタスが、在野の学者たちによって自由に研究され、教えられる場であり、学者と学生の自由な集団でありえたのは、初期のわずかの期間のみであって、次第に新旧二つの学問および学派の対立、抗争の場として、以後たえず緊張状態におかれることになった。

次に、パリ大学であるが、その成立をめぐって引き合いに出されるのがアベラールの名である。当時、各地の司教座寺院・修道院に付属している学校や、その他の私塾的な学校でスコラ学の講義が行われており、そしてそれらを遍歴する少なからぬ学生が存在した。アベラールはその批判的精神によって多くの学生をひきつけ、このゆえに彼はパリ大学の創始者とさえされている。12世紀半ばに彼は亡くなっているが、パリでは12世紀末頃、教師のギルドとしてのウニヴェルシタスが存在したのではないかと推定される。

その後、開講許可権をノートルダムの教会権力が取り上げたらししいが、1215年法王イノケンティウス三世が使節をパリに派遣し、ウニヴェルシタスの定款を制定させた。これによってウニヴェルシタスの団結権がはじめて公認されたのである。つまりパリのウニヴェルシタスは、法王権力に保護された形で自治体として公認され、育成されたとみることもできる。

当時、教会からみれば異端的なプラトンやアリストテ

レスの哲学の研究が流行し、学生たちがそれに強くひかれていたという事情がある。ローマ教会としてはこの事態を見過ごすことができなかった。一方で新しい思想を弾圧し、他方でパリのウニヴェルシタスを教会権力に従順な団体たらしめようとする両面作戦がとられたのである。ウニヴェルシタスはこの動きに基本的に抵抗したが、1229年、市警察と学生との紛争から、パリの教師と学生が大挙してパリを去る（退散）という一種のストライキを行ったさい、法王庁はその隙をねらって、ドミニクス教団の教師にパリ大学で開講させた。こうして法王権力の浸透が既成事実化されていった。

この教団の中からトマス・アクィナスが出、かつて神学を批判する学であった哲学を、神学の奴婢の地位に甘んじさせる理論体系を作り出したとされる。かくて対立は、トマスなどを中心とする神学部とその他の学芸学部との対立となり、迫害を受けるのはすべて学芸学部の教師、摘発側は神学部の教師という構図が次第にできあがった。中世の末にはパリ大学はかつてのアベラールの精神を失い、教会権力の出先機関と化したのであった。

イギリスのオックスフォードでも、12世紀末には相当数の学者・学生が集まっていたと考えられる。13世紀初頭、国王権力を背景にした市警察の横暴に抗議して、学生と教師が大挙してオックスフォードから退散し、ケンブリッジその他の町に移住した（これがケンブリッジ大学の起源ともなる）。その後法王庁が介入し、市政府に対する学生の保護をするべく約束させ、他方、学生たちの監督を、オックスフォードを管轄下におくリンカーン司教座の学監僧にやらせることを定めた。このようにして、オックスフォードの教師と学生もパリと同様な形で教会の支配下に置かれることとなった。

13~14世紀にわたって、大学と司教座教会との間に、大学自治をめぐって抗争が繰り広げられた。この争いは長く続いたが、結局大学側にとって有利な形で決着している。しかし14世紀後半、伝統的神学を批判し、純粋なキリスト教信仰の復興を企てようとしたウィクリフおよびそれを信奉する学徒たちがカンタベリー大司教に弾圧されるという一連の過程を通じて、オックスフォード大学も結局は教会権力の膝下に屈するという結果になった。

以上をありかえるなら、中世における生成期の大学はほとんど教会権力との闘いのなかにあったと言っても過言ではない。

II ベルリン大学の設立

16世紀後半から三十年戦争を経て、ヨーロッパの諸大学は極度の自治破壊と深い沈滯に陥った。キリスト教内の宗派的対立は、とくに領邦的分裂の激しかったドイツで著しく、多くの領邦君主たちは、自国の国教的・精神

的要塞たらしめるべく小規模の大学を創設した。当然のごとく、領邦君主は権力によって、これらの大学の宗派を決定し、大学の組織の細部にまで介入した。

16世紀中葉以降、大学には貴族階級出身の学生が多数入学し、身分制社会を反映して教師よりも優遇されるまでになり、学生たちの所業は放縱をきわめた。大学非公認の同郷人会（Landsmannschaft）なる学生組織がいくつも生まれ、軍人のようにふるまって世間の顰蹙をかった。古参学生は新入生を初年兵のようにあつかい、場合によってはいじめ、自殺者がでたほどである。

他方、教師の頽廃ぶりも学生におとらなかった。教師としての職務を果たさず、酒屋の経営に精を出していったという例も珍しいことではなかったらしい。宴会を催す财力が必要という理由から、学長に、大学で学ぶ貴族子弟の学生が選ばれたこともある。いずれにせよ、大学は三十年戦争によって財政的に破綻しており、教師、なかでも哲学部の教師は大学での正規の講義を次第に無視し、聽講料が直接入る私講義に重点を置いていた。こうした宗教的制限や財政的理由から、16~17世紀の大学に学問の新しい発展は望むべくもなかった。

このような状況のなかで、新しい動きが出てくる。すなわち、プロテスタントの大学、とりわけハレ大学（1694年創設）、ゲッティンゲン大学（1737年創設）における動向である。これらの大学は、たとえば神学部に代わって法学部に重点を置き、自然科学や医学の部門を充実させ、言語学ゼミナールを創設し、そして図書館の充実、演習形式の導入などを試みて、宗教的寛容政策と相俟って、伝統的な他大学に対して圧倒的優位を示したといわれる。ただしこれらのことは、あくまで国家の栄光に寄与するかぎりにおいてであり、見方によっては絶対主義国家により一層従属したともいえる。

両大学に始まった新しい動きは、18世紀末頃までには他のプロテスタント系大学にもいくぶん波及したが、その際、新しい学問研究を牽引したのは古代研究と哲学であった。前者は新人文主義の開始を告げるものであり、後者はヴォルフからドイツ観念論への道を開くものであった。そしてこれらは、のちのベルリン大学設立の指導理念へと連なるのである。

とはいっても18世紀後半の多くの大学の状況は旧態依然たるものであり、教授は収入の面で苦労が絶えず、学生も勉学を放棄して乱暴をはたらくものがいまだ少なくなかった。このような状況のなかで、大学を根本的に見直す動きが出てこざるをえなかつたといえよう。時あたかも、ナポレオンによってドイツの大部分が制覇されつつあった。フランス軍に敗北し、ティルジット条約を結んだプロイセンは、少なくも精神面・文化面においての復興をかけて、ベルリンの職業専門教育施設を拡充・新設し、多くの学者をベルリンやハレに招き、学術・教育の振興に力を注いだ。しかし、ベルリンに大学を、しかも

旧来のそれとはまったく異なる大学を設立することが、やはり敗戦下の焦眉の国民的課題とならざるをえなかつた。

このとき、フィヒテら関係者は新たな大学の構想を求めるべく、さまざまな案を提出している。シュライエルマッハーの構想には、学問と国家との区別、学校（ギムナジウム）と大学とアカデミーとの区別、学生における学問に従事する者と専門事務に就く者との区別、大学の最も本質的部分としての哲学部の位置づけ、大学の自治と大学内部の民主的組織化、等、今日の大学の理念にも連なる多くの重要な提言が見られる。カントやシェリングの大学論の理念に沿ったシュライエルマッハーのこの構想が、最終的には、当時宗務公教育庁長官となったヴィルヘルム・フォン・フンボルトに引き継がれた。彼は、研究と教授と学習が統一されてのみ真の学問的陶冶があり、そしてそれによって人格が形成され、あるいはまた国家的に有能な人間も形成されると考えている。そこには、大学の自治、学問の自由の理念と、国家的見地からの大学の位置づけの視点とが共存している。いずれにしてもフンボルトの努力によって（彼自身は政変のあおりで長官を途中で辞任した）、1810年10月10日ベルリン大

学は開学した。遊學の自由をも含んだ全ドイツ的国民大学として出発したのである、学生はドイツ各地から集まつた。また諸学問を有機的に統一する総合大学であり、伝統的なウニヴェルジデートの名称とその団体原理および四学部制を保持したが、それまで下級学部として位置づけられていた哲学部が他の三学部と同格となった。これ以降なお紆余曲折があるが、ともあれベルリン大学がその後のドイツの大学の一応の範をなしたことは疑いない。

以上に見るかぎり（とくに中世の）大学は教会に対し、つねに対立・抗争の関係にあった。しかし、それとは異なった関係、たとえば大学が教團に対して思想的・精神的な基盤を提示したような例が存在したのかどうか。すこぶる関心をひく問い合わせはあるが、この点は今後の課題に委ねたい。また、日本の大学が以上で見たような西欧の大学の理念と、具体的にいかなる連関があるかについても、同様である。ただ、以上のように西欧の大学の起源を概観するだけでも、今日のわが国の大学の機能や性格の現状、方向性について考えさせられることが少なくないようと思われる。

1992年度前期 開放セミナー

独立者・親鸞の大地—『歎異抄』に学ぶ—

講 師 大谷大学教授 小野蓮明（真宗学）

期 間 5月13日(水)～7月8日(水)〈5回〉

時 間 水曜日 午後6時30分～8時30分

会 場 大谷大学多目的ホール

参加費 5,000円

日 程

回	月 日 (曜日)	テーマ
1	5月13日(水)	「歎異」のこころ
2	5月27日(水)	出遇いにはじまる人生
3	6月10日(水)	いのちの願いと名のり
4	6月24日(水)	大なる目覚め
5	7月8日(水)	無礙道に立つ

テキスト 『歎異抄』（東本願寺出版部刊、200円）、東本願寺編の『真宗聖典』（東本願寺出版部刊、〈大型本〉3,500円、〈中型本〉3,000円）があれば便利です。

放セミナー

ヴァイツゼッカー大統領を読む

講 師 大谷大学教授 大河内了義（ドイツ文学）

期 間 5月16日(土)～7月11日(土)〈5回〉

時 間 土曜日 午後2時00分～4時00分

会 場 大谷大学多目的ホール

参加費 5,000円

日 程

回	月 日 (曜日)	テーマ
1	5月16日(土)	演説の背景
2	5月30日(土)	反ユダヤ主義
3	6月13日(土)	戦後西ドイツの償い
4	6月27日(土)	分割の苦悩と統一の現在
5	7月11日(土)	日本の現状

テキスト 『荒野の四十年』（岩波ブックレットNo.55）

参考書 永井清彦著『ヴァイツゼッカー演説の精神』（岩波書店刊）

『国際仏教研究』研究会報告

日時：1991年7月16日

場所：大谷大学真宗総合研究所会議室

<指定研究>

台湾における佛教学研究の情況

台灣中興大學歷史學科助教授
中華佛學研究所助教授 黃依妹

1980年代になってから、台湾では佛教が盛んになり続けております。従って佛教学に関する研究が注視されて参りました。このことについて、四つの分野にわけて話して参りたいと思います。

一つは、各大学での研究情况であります。今日に至るまで、各大学では、佛教学科を設けることはできない情況が続いています。もちろん他の宗教学科を設立することも許されていないわけです。けれども、歴史学科及び哲学科には、佛教に関するもの、例えば佛教史、佛教美術、印度哲学、華嚴思想、法華經思想というような科目があります。そしてこれと関係ある各大学の先生は、東方宗教学会という研究会を作りました。月一回の研究会を行ない、年一回『東方宗教研究』という機関誌を発刊しております。ところが会員には、民俗宗教とその他の宗教を研究している人もおられますので、誌上にはたまに民俗宗教と道教、キリスト教のものも含まれております。それから、台北市にある国立政治大学辯天研究所には、チベット研究会がございます。月一回の会合がもたらし、会員にはチベット佛教を研究している人がおられます。現在台湾においてチベット佛教を担当される先生は、殆んどこの研究会出身の人であります。

また各大学には、「佛学社」というクラブがございます。専らそれぞれの大学の学生を対象に、基礎佛教学を講義したり、佛教の修行をしています。それ故に、経済力ある寺院が、そのような活動に応ずるために、冬休み或は夏休みの間に、「佛七」とか、「禪七」とか、「夏令營」という宗教活動を行なっております。「佛七」とは、弥陀淨土教の修行、「禪七」とは坐禪の修行を主にやっており、申しまでもなく、弥陀淨土教或は禪宗に關係ある教義をも講義するわけです。そしてこの「佛七」「禪七」というのはきびしい修行といわれております。と申しますのは、一週間寺にこもって、毎日朝四時半から晩九時半まで修行し続けるものであり、もし「精進佛七」という修行であれば、人と話すことさえも禁止されるからで

す。相當にきびしいものですから参加者は「夏令營」に比べて少ないわけです。その「夏令營」とは、一週間或は二週間ほど、参加者は寺に泊って、主に佛教学を勉強します。その内容は、佛教学概論、淨土教学、学佛行儀などであります。しかしこれらの授業は、すべて概論的なものであります。

二つは、小学校から高等学校までの生徒さんの佛教学習でございます。青少年の人格及び自我責任向上させるために、寺院では「佛七」のような行事が盛んに行なわれています。青少年は一週間ぐらい寺院に泊って、念佛の修行をしたり、佛教の行儀を学んだり、佛教の物語りをきいたり、というような生活を過すわけです。そのような行事に参加する青少年は、毎年増え続けています。私のところ鳳山佛教蓮社は、十年前にその行事を始めてから、毎年三回ほど催しています。毎回参加する人は二百名ほどでございます。そのような行事が盛んになってきたのには、今台湾の経済がゆたかになってきたことに伴い、社会秩序がわるくなり、倫理道德も衰えていく、という情況があるからです。

三つは、小学校、中学校及び高等学校に勤めている教員の佛教学研究であります。彼らは、冬休み或は夏休みの時間を利用して寺に泊りまして、佛教の研究及び佛教の修行に勤めます。私は今月の十二日に日本にくる前、つまり六日から八日までの三日間、埔里にある玉佛寺で催された教師学佛及び教育研習会で講義して参りました。この研修会に参加した人はほぼ二百名であります。時間割表を見ると、淨土教学・天台思想及び中觀思想のようなものを研究していることがわかります。この研修会に参加する人々には、もう一つ勉強すべきことがあります。それは佛教と教育とをどのように結びつけていくかでございます。

四つは、佛学院及び佛教学研究所での研究情况でございます。70年代まで、台湾佛教界は主に僧侶人材を養成するために、日本の佛教道場のようなもの、すなわち佛

学院を営んでおりました。その数は少なくありませんでしたけれども、僧侶に学問の世界へ進ませる目的ではなかったようです。と申しますのは、学問より信仰のほうが大事だからです。これは台湾佛教界の一般的な考え方です。それでもこののような教育は、ある程度台湾の若い世代の僧侶のレベルを高めるような成果をあげました。しかし、今日の社会において、佛教はそれだけではやはり社会に対応できませんので、僧侶の教育程度に応じて、佛学院には、初級、中級及び高級というようなコースができました。全体から見ると、設備、行政組織が最もよいのは、中壢市にある圓光寺の圓光佛学院でございます。その他、わりあいに有名なものは、新竹にある福嚴精舎の福嚴佛学院、高雄にある佛光山の東方佛学院などでございます。

このように台湾佛教界は、三十余年の間に、僧侶人材の養成に力を入れてきたことによって、大学を出た人で僧侶になるものが増え続けています。そして佛教学研究レベルも高くなってきています。80年代に入ると、三ヵ所の佛教学研究所が設立されました。それはさきほども申し上げました圓光寺の圓光佛学研究所、台北市にある中華佛学研究所、そして同じく台北市にある法光寺の法光佛学研究所であります。

この三つの研究所の生徒は、大学院レベルであるといえます。前にも述べましたが、政府の行政方針の関係で、台湾の大学では佛教学科を設立することができないので、彼らは大学の時代に佛学社というクラブで活躍してきたものが殆んどでございます。彼らが研究所に入って学ぶ言語は、サンスクリット語、チベット語、パーリ語及び日本語などであり、ドイツ語とフランス語に弱いのが今日の現状であります。

教育する側は、伝統の佛教教育の方法と違いまして、生徒の研究能力を高めるために、さきほど申しました言語の講読科目を設けて勉強させます。生徒は自分の興味

によって、チベット佛教、敦煌佛教、インド佛教ないし中国佛教を選んで研究しております。以上申しましたように、現代的な佛教学研究は始まったばかりであるといえます。あまり歴史が長くない情況なので、彼らの中から具体的な研究成果が出るまでには時間がかかると思います。

ところが、これらの研究所を出た生徒にとって一番困っていることは就職の問題です。もちろんこの三つの研究所の設立にあたっては、台湾政府の文部省からの許可をもらいましたが、文部省が修士の学位を与えてくれないので。僧侶であればあまり問題にならないようですが、在家人であればその資格をとれないかぎり、就職や進学にも問題になります。だからこの三つの研究所の先生方は、このような問題を解決するように努力する必要があります。その方法の一つは、外国の大学との交流によって、優秀な人材を外国へ留学させることであります。

この三つの研究所のうち、一番古い中華佛学研究所では、毎年『中華学報』という機関誌を発刊してきました。また圓光佛学研究所も、今年から『圓光学報』を発刊しております。

以上申しましたのは、今日台湾における佛教学研究の情況であります。台湾佛教界では、佛教を広げるためのこれらの事業はいままですべて無料で営んできました。もちろん資金は信者さんから寄付してもらい、問題になっておりませんでしたが、はたしてそのような経営方法が時代についていかずと疑問視されています。これも将来の台湾における佛教学研究の發展にからんできますから、われわれはこの問題を考えるべき時期が迫ってきていると感じております。日本佛教界のお智恵を賜りたく存じます。

ご清聴どうもありがとうございました。

大谷大学真宗総合研究所 国際佛教研究班編

『欧文雑誌目録』 (1992年2月現在)

これまでの海外佛教研究班、および1991年度より発足の国際佛教研究班によって、仏教研究に関連する数多くの欧文雑誌が収集されてきました。今後の佛教研究の資料として活用していただけるよう、このたびその目録を出版いたしました。

「第5回国際真宗学会」参加報告

国際仏教研究班チーフ・教授 多田 稔

第5回国際真宗学会は1991年8月3日から三日間、カリフォルニア大学バークレー校、併びにその隣あわせに位置する仏教大学院との共催で、バークレー校の同窓会館で行なわれた。隔年に開かれるこの学会は、そもそも龍谷大学に始まり、ハワイ、バークレー、ハワイとその会場をアメリカに移し、今年は再度バークレーで開かれることになった。太平洋の両岸からはもとより、大西洋の両岸からの参加者をも含めて、百名以上の真宗学者をはじめ仏教学者、神学者、開教師たち、そして広く仏教に関心を持つ世界各国からの出席者たちの参加をえて、連日英語による研究発表が行なわれ、パネルが開かれ、熱心な討議が行われたことであった。



永富正俊会長の冒頭スピーチ

従来、この学会には、大谷大学のスタッフ数名の方が正会員として登録され、これまで四回の大会にも各自で参加してこられたのであるが、大谷大学から今回は若いスタッフと参加希望の院生たち総勢14人ではじめてツ

アーを組み参加した。そして、参加して討論に加わったばかりではない。真宗学の安富信哉氏と樋口章信氏がそれぞれ「金子大栄『真宗学序説』再考」「信心の近代化・信の一念と清沢満之の信念」と題して研究発表を行なったのである。安富氏は、現在真宗学といわれているものが、宗学と呼ばれていた時代より説き起こし、宗学の発展を追って歴史を下り、清沢満之の意義を説き、その高弟金子大栄の『真宗学序説』の果した役割りを述べ、さらに、現代の宗教学からみて、その著書のもつ意義を説明されたのである。

樋口氏の発表については、後ほど御自身の言葉で述べていただこう。

お二人の爽やかで歯切れのよい英語での発表は、この学会ではこれまでみられなかったトピックと相いまって、学会に新風を吹き込んだものとして参加者たちからの好評を博したのであった。

そして学会は三日目の最後のパネル<真宗学は如何にあるべきか 解釈学上の諸問題>でもって、その終幕を迎えることとなった。このパネルにおいては、先づフィリピンの少壮気鋭の学者ルーベン・アビト氏が、これまでの親鸞解釈学の方法論を網羅して俎上にのぼせ、氏の造詣深い上原専禄による独特の親鸞解釈のもつ意味を語気鋭く、熱っぽい調子で説かれたのであった。ついでブラジル、サンパウロより来会された南米の真宗学の重鎮グスターヴォ・ピント氏による国際化にともなう宗教の「概念化」「觀念化」への危惧、東西異文化が出会い、異なる言語の衣裳をまとった二つの宗教が向き合った時におこる表面的理の背後にひそむ問題、つまり国際化にともなう宗教の「概念化」という大問題が静かに提示されたのである。そして最後にスタンフォードの若き俊才、マーク海野氏による発表、真宗学にポスト・モダニズムの光を当ててみると如何なることにあいなるのか、との問題提起が行なわれ、賢明にも氏の私見もって締めくくられたのであった。実は、このようなパネリストたちに対して、専門家でもない私がレスポンデント(応対者)の役目を果たさねばならぬ羽目になっていた。実はプログラムの中、この役割りの私の名前をみたのは日本出発の直前であった。アビト氏の発表に対しては、氏の発表に関する限りでの上原専禄の親鸞解釈のもつ重要性の認識に対して、私は全面的賛意を表した。そして



学会発表の1コマ

ピント氏の抱く国際化にともなう宗教の「概念化」の諸問題については、前日なされたハーヴァードのカウツマン教授の講演内容でもあった「宗教対話」を今回のような学会で重ねていくことこそ両宗教にとって実り多いプロセスとなる、という私見を述べさせていただいた。海野氏の才氣あふれる発表に対しては、宗教学においては言うまでもなく、真宗学においてすら、学として存在する限りでは、現代流行の学説のもつ各種のアプローチを許容し適応させるのは当然のことであろう。ただし、宗教研究にあたっては、知性の行使によってその彼方にある物自体ともいるべきターゲットを把握することは不可能である。その当体の声を聞くか、それによってよみがえってこそ、知性の行使が真の栄光に包まれ意味を持ってくるのではないか、といった感想を述べさせていただいた。

かつて私は、『仏教東漸』の中で過去三十年ばかりの間の主としてアメリカにおける禅仏教の受容の過程をまとめ、将来問題となるのは浄土真宗であろうと言った。この研究所の所報にも書かせていただいた。今回の学会のテーマが「国際真宗学会、十年の回顧と展望」であり、真宗学が国際舞台に登場し、異文化ともろに接触するようになりだして10年経ったのである。明治以降の日系移民の間におけるアメリカの真宗とは一味違った光を浴びてきたのである。パネルの最後に当って、バークレー校のランカスター教授が、浄土真宗の海外における将来の発展の見通しをどう判断するか、と皆に質問されたのであるが、その際の聴衆における反応と同様、私の答も決して威勢のよいものとはなり得ない。これにはさまざまのファクターがある。しかしながら今一つだけ言える

ことは、浄土真宗は海外にあっては禅仏教と一体となって、つまり、すでに異文化の中に受容過程が始まっている禅と、文字通り表裏一体となってこそ発展していくのではないだろうか。そのためにもこの学会のもつ意味は大きいと思う。

最後のパネルが終り、三日間の学会は閉会式を迎えた。そして最後に、事務局長稻垣教授から、二年後の次回学会開催地を太平洋の西側へ戻し、大谷大学にお願いしたい、という学会理事会からの要望が出された。これをうけ、「皆さんの強い御要望を帰国して学長にお伝えしたい。そしてそれが実現した暁には、大谷大学で再びこのようにお会いしたいものです」とお答したことであった。(この要請はその後、正式に寺川学長の許に送られてきた。文学部長併びに第一研究室主任をはじめ関係の方々との協議を経て、同年末までに学長は受諾されたと聞く。) 今回の大会の裏方に徹されたケネス・田中、ステーヴン・グッドマンの両教授に深謝してわれわれはバークレー校を離れた。

学会二日の午後のツアーを除いては、早朝から夕方までの学会出席のため、一歩も外へ出る機会のなかったわれわれは、散会後、バークレー別院へ今井亮徳さんを訪ねた。本堂でお参りし、現地における御苦労の一端を聞かせていただいた。そして皆で海岸のシーフード・レストランへ出掛けた。ここでは、大いに日本語での話がはずんだ次第であった。翌日バークレーを離れ、サンフランシスコ空港からロサンゼルスへ飛び、半日観光の後、ロスの別院へ斎藤暁紅先生を訪ねた。ここでも、皆してお参りしたあと、先生の話をきき、夕食まで御馳走になった。大陸の夏の日も暮れ、人通りもまばらになったりト

ル東京の一角の「からおけ」に皆で出掛け、先生と共に夜更けまで、声を限りに歌つことであった。かくしてツアー参加者、それぞれに何か心に感じるものを抱いて、三日後の8月9日には無事大阪空港に帰ってきたのであった。以下は今回の学会プログラムの全容である。

8月3日(土)

9:00 開会式

司会：アルフレッド・ブルーム大会副委員長
(IBS学部長)

挨拶：稻垣久雄事務局長（龍谷大学教授）

歓迎の辞：山岡誓源（IBS学長）

ルイス・ランカスター（カリフォルニア大学バークレー校教授）

開会宣言：永富正俊学会会長（ハーヴァード大学教授）

10:00 パネル1<浄土真宗と宗教的対話>

司会：リチャード・ペイン（IBS）

1) 「宗教的多元世界に於ける浄土真宗」

アルフレッド・ブルーム（IBS）

2) 「仏教とキリスト教の礼拝対象」

ルイス・ランカスター（カリフォルニア大学バークレー校）
ライオネル・ルースクルッグ
(コンコルディア大学)

3) 「互いの眼を通して：浄土真宗とカソリックの対話」

ケネス・クレイマー（サンノゼ州立大学）

4) 「不拝世俗王：浄土真宗と社会倫理」

ジェームズ・フレデリック
(セント・パトリック神学校)

13:00 第一部会<浄土真宗の理論と実践>

司会：フィリップ・アイドマン（IBS）

5) 「一乗海：親鸞の一乗の解釈について」

那須英勝（神学大学院）

6) 「曇鸞の浄土觀」

佐々木恵精（京都女子大学）

7) 「親鸞とティリッヒの否定」

野村伸夫（京都女子大学）

8) 「金子大栄『真宗学序説』再考」

安富信哉（大谷大学）

9) 「世親『浄土論』の構造について」

リチャード・ペイン（IBS）

10) 「本来の仏教としての浄土真宗」

宮地廓慧（IBS）

15:30 パネル2<浄土教に於ける聖と俗の連係>
司会：マーク・海野（スタンフォード大学）

11) 「末法思想の中国的背景」

ラッセル・カークランド
(スタンフォード大学)

12) 「惠信尼文書にみられる女人往生」

ジェームズ・ドビンズ
(オペリン大学)

13) 「真宗学と世俗化」

嵩満也（龍谷大学）

14) 「米国仏教会（BCA）の真俗二諦」

デイヴィッド・松本
(ストックトン仏教会)

17:30 終了

19:30~21:30 懇親会 於IBS

8月4日(日)

9:00 第二部会<浄土真宗教義学の諸問題>

司会：ルース・タブラー
(ハワイ仏教研究所)

15) 「信心の近代化：信の一念と清沢満之の信念」

樋口章信（大谷大学）

16) 「現生正定聚について」

紅穂英顯（相愛大学）

17) 「親鸞に於ける存在と時間」

五十嵐明宝（大東文化大学）

18) 「真仏土について」

松林芳秀（IBS）

10:45 第三部会<浄土真宗の現代的課題>

司会：新井俊一（相愛大学）

19) 「性的差別と浄土真宗：悪人正機をめぐって」

ジョン・庵原（龍谷大学）

20) 「人生経験の宗教的内容：浄土教の視点から」

ゴードン・フン、グレゴリー・フン（サンフランシスコ在住）

21) 「キリスト教の祈りと念佛：二宗教の類似と相違」

チャールズ・ローマン（神学大学院）

12:15~14:00 昼食、及び総会

14:15 遠足（バスにてワイン工場見学）

19:00 晩餐会、及び講演（於グリーンズ・レストラン、サンフランシスコ）

司会：スティーヴン・グッドマン（IBS）

挨拶：宮地廓慧（IBS）

講演：「不可思議なるもの：宗教的対話の成立
根拠」
ゴードン・カウフマン
(ハーヴァード大学教授)

応対者：多田 稔（大谷大学）

15:30~16:00 閉会式

[総会の決議事項]

8月2日夕刻の運営委員会での討議を経て、4日の総会では次の提案がなされ、決定された。

1. 副会長を置くこと。
2. それに伴い会則を一部改正すること。
3. 初代副会長は特別小委員会で選出すること。
4. 1993年の第6回大会を大谷大学で開催してもらうよう、同大学に依頼すること。
5. 新たに南米地区を設け、代表者をグスタヴォ・ピント教授とすること。

[副会長にA. ブルーム博士]

ハワイ大学名誉教授で現在IBSのディーンであるアルフレッド・ブルーム博士が初代副会長に選出された。同博士は1926年生まれ、1963年にハーヴァード大学で博士号を取得。長年真宗学の研究と指導に当ってこられ、著書には博士論文の“Shinran's Gospel of Pure Grace”、“歎異抄の講義”などがある。

第5回「国際真宗学会」に参加して

本学非常勤講師 橋 口 章 信

(1)はじめに

この1991年8月3日から5日までの3日間、カリフォルニア大学Berkeley校に於て、「真宗研究十年間の回顧と展望」というテーマを以て、第5回国際真宗学会が開催された。米国内外から約100名の参加者を得た模様である。大谷大学からは教員等10数名が参加した。今詳細を述べる紙数はないが、全体としては真宗学を基本にして異文化に触れたと云う意味で、大変有意義なものになったと思う。基本的な流れはIASBS会長のM. Nagatomi教授の発表された“The Internationalization of Shin Buddhist Studies: Shinran's Self and Other(親鸞の「自」と「他」)”によく表れていたと感ずる。

(2)学会発表の概要

自信がないまま、2日目の朝最初の私の発表となった。最近、清沢満之の「自己」の内容について関心があるので、“The Modernization of Shin Faith: Kiyozawa's Shinnen as a Modern Expression of Shinran's Shin no Ichinen”(「現代における真宗の信：親鸞の「信の一念」と清沢満之の「信念」という題を以て英文レジメを読

8月5日(月)

9:00 第四部会<解釈と表現>

司会：藤谷政躬 (IBS)

22)「仏教英語再考」

ルース・タブラー

(ハワイ佛教研究所)

23)「真宗の基本原理の図式解説」

稻垣久雄 (龍谷大学)

24)「花岡大学の仏教童話」

朝枝善照 (龍谷大学)

10:15 パネル3<阿弥陀仏と浄土：概念とイメージの現代的変容>

司会：ケン・田中 (IBS)

25)「宗教的多様性と宗教的真理」

ゴードン・カウフマン

(ハーヴァード大学)

26)「阿弥陀仏と浄土」

海野大徹 (スミス大学)

27)「究極的指標としての阿弥陀仏」

徳永道雄 (京都女子大学)

28)「法然と親鸞の宗教的象徴：阿弥陀仏と浄土」

町田ソウホウ (プリンストン大学)

29)「アメリカの状況に於ける阿弥陀仏と浄土の象徴化」

ケン・田中 (IBS)

応対者：アルフレッド・ブルーム (IBS)

13:30 パネル4<真宗学は如何にあるべきか：解釈学上の諸問題>

司会：ジェームズ・ドビンズ

(オベリン大学)

30)「親鸞の思惟に対する上原專禄の解釈」

ルーベン・アビト (パーキンス神学校、南メソジスト大学)

31)「浄土真宗の国際化に於ける概念化の問題」

グスターヴォ・ピント

(ブラジル、サンパウロ在住)

32)「浄土真宗のポストモダニズムの解釈」

マーク・海野

(スタンフォード大学)

んだ。

親鸞の思想の根幹をなす「顕淨土真実教行証文類」に於て確かに言えることは、信巻に展開される「無量寿經」第18願成就文中で親鸞が、「乃至一念せん。至心に廻向せしめたまへり」と訓みを変えて、自力的口業念佛への傾向を厳しく戒め、「一念の淨信」と「無量寿如來会」に言われるよう、全体を統観する「信の一念」を我々に「落在」せしめたということである。勿論、それは「利他廻向の至心」以外のなものでもない。

満之の云う信念は、彼の著作中の「三心」解釈をみると「至心」と「欲生心」とを自力に配当しているあたり、正統的解釈より見れば、親鸞と違う表現を用いている点、不思議な部分がある。しかし、これこそが満之の満之たる現代性なのではないか。この「自力」は所謂自力ではない。他力の世界でこそ力を發揮する「自我」の分限である。それほどまでに近・現代は「自我」というものの豊饒性に報いなければならないと彼は見抜いていた。歎異抄と共にエピクテタスや阿含經に魂の安らぎを見い出したのは、現代において眞実信心に支えられた社会倫理を実現しようと試みたからであろう。本質的には同じ「自我」でしかないのだが、表現的意味からすれば、鎌倉時代の「自我」の位相と近・現代のそれとは、その関わる材料が多分に異なっているので、我々は、特に国際真宗という以上は、充分留意する必要がある。

レジメを読んだ後、James Dobbins 教授より質問を頂いた。「もし親鸞が清沢満之に会って彼の考え方を聞いたら、何と言うだろうか?」と。清沢満之の云う「自己」を見抜く鍵は「信念」という一語にしかありえないと考えているので、私は、親鸞がもし現代の時空に姿を現したならば、彼が、合理主義的な思考、もっと言うと科学的思考を強く要請する西洋的思惟の本質を、その合理性をも尊重しつつ積極的に批判し、行動的事実のなかで内面凝視を徹底して生きたその方法をむしろ押し進めるように勧めるであろう、と応えた。

3日間の日程を終えてみて、1984年1月にハワイ大学にて行われた“2nd Conference on East-West Religions in Encounter”を想起した。“Paradigm Shifts in Buddhism and Christianity”(「仏教とキリスト教におけるパラダイムの転換」)というテーマの学会であったが、そこで清沢満之研究によってPh.Dを取得されたEckerd College のギルバート・ジョンストン教授に話を伺ったことを思い出したのである。氏は“Kiyozawa Manshi's View of the Self”(「清沢満之の自己について」)という題で発表され、私としては大変興味あるものであった。例えば「絶対他力の大通」の部分訳のなかで、「此の現前の境遇に落在せるもの」を“something that happens to be here in these present circumstances”とされたところなどは「落在」の意味の読み取りに於て関心のある所である。

満之の著作の英訳は非常に少ないのだが、そのkey-termである「信念」の訳語について言えば、羽田信生氏英訳の“December Fan”(東本願寺出版部、1984年)の“religious conviction”という形に非常に共感を覚えた。満之の信念は faith よりも conviction(確信)という言葉によってこそ、明瞭になるだろうと思われるからである。主我的現代に於て、信ずる自己の主体的位置の自己了解について必ずしも明確ではない以上、むしろ明晰な「自我」としての感覚機能の回復が願われているからである。

(3)おわりに

以上粗述させて頂いたが、今回強く思ったのは、ある人の思想が、異文化の狭間にせめぎ合うとき、少なくともそのkey-termに関しては、あえて自分の考えで置換できる程度の発想の柔軟性を持ちたいということである。「確信」というものは「視点転換の柔らかさ」を育む世界であろうから。

全体として思ったもう一つのことは、「国際」ということの意味である。親鸞は「際」に「キハ」と訓を付したが、我々が相互に影響を与えながら住んでいる国と国との「キハ」に於て、現代ほど人間としてのコミュニケーション不通が問題視されたことはない。それは同一言語使用者にとっても等しく重大な問題なのであるが、特に異言語が介在することにより、その双方の差異が質的にも量的にも、より強調されて、逆に、限りなく向い合う世界に転換できる契機が出現するのではないか、とさえ夢想したことである。

最後に、大谷大学の学生、教員合同のこの初めての学会ツアーパーに参加できて大変嬉しいことであった。特に生活を共にすることは大事なことであると思った。学会そのものも大事なことであるが、それ以外の時間をいかに使用するかが無形の精神的宝を頂く鍵になるのだろう。私も今後は余りに課題を多く背負うというよりも、一歩ずつできる範囲の中で、このような集いに参加したいと思う。ツアーパーの途上でいろいろと皆さんにご苦労をおかけした。同行の皆様に心から感謝したい。

1991年度後期 開放セミナー

大乗佛教の原点を問う—龍樹の『中論』一

講 師 大谷大学教授 小川一乗（仏教学）

期 間 10月2日(木)～12月4日(木)〈5回〉

時 間 水曜日 午後6時30分～8時30分

会 場 大谷大学尋源館教室

参加費 5,000円

概 要

世の中には、仏教という名のもとに種々の雑多な現象が見られます。それらの現象から仏教を理解しようとすると、仏教は得体の知れない摺みどころのないものとなってしまいます。仏教は一体なにを説こうとしたのでしょうか。

紀元前5世紀頃、インドにおいて仏教は成立しました。その後、西暦紀元頃、在家中心の大乗佛教が興隆し、その結果、インドの伝統的な民族宗教や習俗の影響を受け、それを取り入れるようになったために、仏教は次第に密教へと変質し、12世紀になって、仏教はインドから姿を消しました。中国や日本に伝播した大乗佛教も、その国の固有の民族宗教や習俗を取り入れた結果、主客が逆転して、いわゆる“庇を貸して母屋を取られる”の類いとなってしまい、仏教の原点が見失われ、仏教とは似て非なる有様となっている状況も多く見受けられます。それを仏教の展開と見るか、非仏教化と見るか。インドに始まった仏教は、種々の部族が混在する中の釈迦族という一小部族の王子によって説かれた教えです。それがインドの民族宗教という範囲を越えて世界宗教となつた普遍性とは何であるのか。今回は、インド大乗佛教の偉大な思想家 Nāgārjuna（龍樹150-125 ca）の代表作『中論』に基づいて、「大乗佛教の原点とは何か」と問うことによって、それを明らかにしながら、仏教の現代的意義を考えていきたいと思います。

日 程

回	月 日 (曜日)	テーマ
1	10月 2日(木)	釈尊の仏教
2	10月 16日(木)	「縁起」と「空」
3	10月 30日(木)	輪廻の形成
4	11月 6日(木)	生死即涅槃
5	12月 4日(木)	無縁の大悲

おしえの史的検証・浄土真宗—出家と在家—

講 師 大谷大学教授 名畠 崇（仏教史学）

期 間 10月5日(土)～12月14日(土)〈5回〉

時 間 土曜日 午後2時00分～4時00分

会 場 大谷大学尋源館教室

参加費 5,000円

概 要

「出家」と「在家」という視点から、親鸞から蓮如まで、浄土真宗の歴史を確かめてみたい。

古代東アジアに広まった仏教は、貴族・国家の権威や地位を飾り守る役を担った。そこで伽藍・仏像・法会など荘厳な世界が展開し、出家の功徳が謳われた。古代国家が崩壊するなかで、法然のおしえは「慈悲」により仏教の根本を問いただし、これまでの世界を変換させるものであった。

そのおしえは親鸞により論証され「真理」として確立した。実践のうえでは、出家と在家のありかたを問い合わせ、眞の仏弟子として立つ地平が開かれた。しかし、おしえの社会的実現は容易でなかった。大社寺が公家や武家とともに、王法・仏法守護の理念をかかげ「國家」機構の確保をはかり、くりかえし弾圧を加えたからである。

南北朝の内乱は、おしえを社会に実現するうえに転機をもたらした。本願寺の存覚は、おしえは現実に「在家止住の土民」と「女人」のうえに説かれたとして、主たる身分階層を明確にした。

土一揆が激発するなか、応仁・文明期に社寺や公家・有力武家は衰退する。蓮如は在家・悪人・女人めあてのおしえをかかげ、人びとに仏の慈悲による自立と解放をうながし、彼岸と此岸にわたる仏法領の世界の実現をみた。

日 程

回	月 日 (曜日)	テーマ
1	10月 5日(土)	世界の変換
2	10月 26日(土)	真理の地平
3	11月 2日(土)	装いの機構
4	11月 30日(土)	歴史の弁証
5	12月 4日(土)	世界の実現

研究所彙報

研究所委員会

〈平成 3 年〉

- 10月23日(木) 午後2時30分 於 真宗総合研究所会議室
 議題 1. 平成4年度「一般研究」募集について
 2. 平成4年度「開放セミナー」について
 3. 『研究所報』『研究所報』の編集について
 4. その他

- 12月12日(木) 12時 於 真宗総合研究所会議室
 議題 1. 平成4年度「一般研究」について
 2. その他

〈平成 4 年〉

- 3月17日(木) 午前10時30分 於 真宗総合研究所会議室
 議題 1. 平成4年度「指定研究」について
 2. その他

「指定研究」チーフ連絡会

〈平成 4 年〉

- 3月16日(金) 午前10時 於 真宗総合研究所会議室
 議題 1. 平成2年度「指定研究」について
 2. その他

「指定研究」全体会議

《大学史編纂研究》

〈平成 3 年〉

- 7月24日(木) 午後4時10分 於 22研究室(研究所内)
 議題 1. 夏期休暇中の研究計画について
 2. その他

- 10月31日(木) 12時 於 22研究室(研究所内)
 議題 1. 今後の研究計画について
 2. その他

- 12月12日(土) 午後5時30分 於 22研究室(研究所内)
 議題 1. 諸報告
 2. その他

〈平成 4 年〉

- 2月12日(木) 午後2時 於 22研究室(研究所内)
 議題 1. 諸報告
 2. その他

《国際仏教研究》

〈平成 3 年〉

- 7月8日(月) 12時10分 於 真宗総合研究所会議室
 議題 1. ビジティング・スカラについて
 2. その他

- 10月2日(木) 12時10分 於 真宗総合研究所会議室
 議題 1. バークレー国際真宗学会報告

2. その他

- 11月6日(木) 12時10分 於 真宗総合研究所会議室
 議題 1. AAR参加の報告
 2. 資料の収集ならびに整理に関する報告
 3. その他

- 12月4日(木) 12時30分 於 真宗総合研究所会議室
 議題 1. 國際交流について
 2. その他

- 2月12日(木) 12時10分 於 真宗総合研究所会議室
 議題 1. 本年度のまとめにむけて
 2. その他

- 2月26日(木) 午後1時 於 真宗総合研究所会議室
 議題 1. 本年度のまとめについて
 2. 第2回国際仏教文化交流研究会への参加について
 3. その他

《大学開放研究》

〈平成 3 年〉

- 7月17日(木) 午後6時 於 38研究室(研究所内)
 議題 1. 「開放セミナー」講義録出版について
 2. その他

- 7月26日(木) 午後1時 於 38研究室(研究所内)
 議題 1. 「開放セミナー」講義録出版について
 2. 同窓会関連事業について
 3. その他

- 10月23日(木) 午後4時 於 38研究室(研究所内)
 議題 1. 生涯学習フェスティバル参加について
 2. その他

《真宗史料研究》

〈平成 4 年〉

- 2月28日(金) 午後5時 於 38研究室(研究所内)
 議題 1. 仮称『真宗史料体系』刊行案について
 2. 今後の研究計画について
 3. その他

《西藏文献研究》

〈平成 3 年〉

- 10月7日(月) 午後5時30分 於 24研究室(研究所内)
 議題 1. 研究成果の出版について
 2. その他

研 究 会

《大学史編纂研究》

〈平成 4 年〉

- 3月13日(金) 午前10時30分 於 22研究室(研究所内)
 内容 「満之の教育観—自信教人信一—」
 研究員・教授 神戸和磨氏

《国際仏教研究》

〈平成 3 年〉

- 11月21日(木) 午後4時10分 於 真宗総合研究所会議室

内容 「今技由郎博士との懇談会」
パリ国立アカデミー 今技由郎氏
11月26日(木) 午後4時10分 於 真宗総合研究所会議室

内容 「ロシアにおける仏教」
龍谷大学招待研究員 ガブリエル・パウエル氏
(平成4年)
2月26日(火) 午後4時 於 真宗総合研究所会議室

内容 「中国における最近の仏教研究の状況」
国立社会科学院仏教研究室主任 楊 曾文氏
3月4日(木) 午後4時 於 真宗総合研究所会議室

内容 「マッキントッシュによる多言語多文字処理」
パリ国立アカデミー 今技由郎氏
《真宗史料研究》
(平成4年)
2月18日(火) 午後4時 於 22研究室(研究所)

内容 1. 園林文庫史料整理カードによる分類試案作り
2. 次年度作業計画の作成

2月19日(水) 午後3時 於 22研究室(研究所)

内容 「東本願寺史料の全体を勘案した新分類試案の検討」

3月10日(火) 午後2時30分 於 22研究室(研究所)

内容 「東本願寺史料分類試案の作成」

3月11日(木) 午後3時 於 22研究室(研究所)

内容 1. 園林文庫史料カードからパソコン入力方法決定
2. 東本願寺史料分類案決定
3. 次年度作業計画の検討

学会等参加

《第5回国際真宗学会大会》

国際仏教研究班のチーフ多田稔教授以下4名が、アメリカ合衆国カルフォルニア州バークレーで、8月3日から8月5日まで開催された「第5回国際真学会大会」に参加した。

《アメリカ宗教学会》

国際仏教研究班の宮下晴輝研究員と加来雄之研究員は、アメリカ合衆国ミズーリ州キャンサスシティで、11月23日から11月26日まで開催された「アメリカ宗教学会」に参加した。

《第3回生涯学習フェスティバル》

大学開放研究班の片野道雄研究員、大橋洋研究補助員は、大分県別府市で、11月2日に開催された「第3回生涯学習フェスティバル」に参加した。

《日米大学生涯学習機関ティーンズサミット》

大学開放研究班の大竹鑑研究員(チーフ)は、東京・早稲田大学学術情報センター国際会議場で、12月9日10日の両日にわたり開催された日米大学生涯学習機関

ティーンズサミットに参加した。

《史料調査》

大学史編纂研究班の延塙知道研究員と稻葉広由研究補助員の両氏は、平成4年2月15日~17日の間、東京大学宗教学研究室において「明治期の東京帝国大学カリキュラム及び清沢満之関係史料の調査・採集」を行なった。

《宗教と文化に関する国際討論会》

国際仏教研究班の桂華淳祥研究員は、3月27日28日の両日、台湾の輔仁大学において開催された「宗教と文化に関する国際討論会」に参加した。

1991年度後期「開放セミナー」開催

1991年度前期の「開放セミナー」は、小川一乗教授の「大乗仏教の原点を問う 一龍樹の『中論』」と名畠崇教授の「おしえの史的検証・浄土真宗 一出家と在家一」の二つのセミナーを開講した。その日程及びテーマは次の通りであった。

◆小川一乗教授「大乗仏教の原点を問う 一龍樹の『中論』」

10月2日(木)	午後6時30分	釈尊の仏教
10月16日(木)	午後6時30分	「縁起」と「空」
10月30日(木)	午後6時30分	輪廻の形成
11月6日(木)	午後6時30分	生死即涅槃
12月4日(木)	午後6時30分	無縁の大悲

◆名畠 崇教授「おしえの史的検証・浄土真宗 一出家と在家一」

10月5日(土)	午後2時00分	世界の変換
10月16日(土)	午後2時00分	真理の地平
11月2日(土)	午後2時00分	裝いの機構
11月30日(土)	午後2時00分	歴史の弁証
12月14日(土)	午後2時00分	世界の実現

人 事

研究所主事の任期満了に伴い木村宣彰助教授が3月31日付けで退任し、平成4年4月1日から宮下晴輝助教授が主事に就任する。

また、研究所の事務を担当されていた菊岡靖子さんは、3月31日付けで退職され、4月1日からは前田聰子さんがその職を引き継ぐことになります。菊岡靖子さん、ありがとうございました。前田聰子さん、ご活躍を期待いたします。

研究 所 報 第 27 号

1992年3月31日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒 603 京都市北区小山上総町